

ノ意見ヲ聽クハシ

刑事裁判手續中何レノ場合ニ於テモ懲戒裁判所ハ其ノ手續終了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得

第五十二條 懲戒裁判所ノ決定ニ因リ又ハ當然職務ヲ停止セラレタル後其ノ判事ノ爲シタル職務上ノ行爲ハ無効トス

第五十三條 被告ハ職務停止ノ決定ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第六章 懲戒裁判手續トノ關係

第五十四條 刑事裁判手續中ハ同事件ニ付被告ニ對シ懲戒裁判手續ヲ開始スルコトヲ得ス

懲戒裁判所ニ於テ判決ノ言渡前同事件ニ付被告ニ對シ刑事訴追ノ始マリタルトキハ其ノ事件ノ判決ヲ終ルマテ懲戒裁判手續ヲ停止スヘシ

第五十五條 刑事裁判ニ依テ法律ニ觸レサルニ因リ免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタルトキト雖同一ノ所爲ニ付懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルヲ妨ケス

刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ヲ起サハル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキハ懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルコトヲ得

第七章 補則

第五十六條 懲戒スヘキ所爲ハ本法實施前ニ關ルモノト雖本法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第五十七條 此法律ハ明治二十三年十二月一日ヨリ施行ス

◎ 訴 訟

○ 法律 明治廿三年八月十五日

朕民事訴訟費用法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治廿四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御 名 御 璽

法律第六十四號

民事訴訟費用法

第一條 民事訴訟法ノ規定ニ於ケル訴訟費用ハ以下數條ノ規定ニ從ヒ之ヲ算定ス

第二條 訴狀其他總テ書類ノ書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金二錢五厘トス但半枚ニ滿タサルモノモ亦同シ

圖面ハ一葉ニ付金十錢トス但別ニ測量ヲ要シタルトキハ其測量費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第三條 翻譯料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金五拾錢トス但半枚ニ滿タサルモノモ亦同シ

第四條 民事訴訟用印紙法ニ從ヒ貼用シタル印紙ノ費額ハ其代價ニ依ル

第五條 執達吏ノ手数料及ヒ立替金ハ執達吏手数料規則ノ規定ニ從テ
 第六條 郵便料電信料及ヒ運送料ハ其實費ニ依ル
 第七條 官報、公報及ヒ新聞紙ヲ以テ公告シタル公告料ハ各其定價ニ依ル
 第八條 民事訴訟法第二百二十七條ノ規定ニ從ヒ辯護士ノ附添ヲ命シタルトキハ其報
 酬ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル
 第九條 當事者ノ日當ハ出頭一度ニ付金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テハ
 此日當額二十五錢トス
 第十條 證人ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テハ
 此日當額給セズ
 第十一條 鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢乃至五圓ノ範圍内ニ於
 テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル
 鑑定ヲ爲スニ付キ別ニ支出シタル費用ハ其實費ニ依ル
 第十二條 當事者ノ滞在費ハ滿八里以外ノ地ヨリ來リ滞在スルトキハ一日金二十五
 錢トシ證人、鑑定人及ヒ通事ノ滞在費ハ一日金五十錢トス
 第十三條 當事者、證人、鑑定人及ヒ通事ノ旅費ハ海陸滿一里毎ニ付キ金十錢トス
 通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス
 外國ニ在ル當事者ノ旅費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第十四條 判事及ヒ裁判所書記檢證ヲ爲メ實地臨檢ヲ爲スニ付テハ旅費及ヒ滞在費
 ハ證人ニ準テ
 第十五條 本法ニ定メサル必要ノ費用ハ其實費ニ依ル
 第十六條 強制執行及ヒ非訟事件ニ關ル費用ハ執達吏手数料規則ニ定メタルモノナ
 除テ外前數條ノ規定ニ準用シテ之ヲ算定ス
 強制執行又ハ非訟事件ニ關シテ保管人若ハ管理人ヲ任命シタルトキハ其費用ハ裁
 判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル
 ○法律 明治二十三年八月十五日
 朕民事訴訟用印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨ
 リ施行スヘキコトヲ命ス
 御名 御璽
 法律第六十五號
 民事訴訟用印紙法
 第一條 民事訴訟ノ書類ニハ以下數條ノ規定ニ從ヒ其正本ニ印紙ヲ貼用ス可シ但シ
 裁判所書記ニ口述シテ調書ヲ作ラシメタルトキハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ
 第二條 財産權上ノ請求ニ係ル第一審ノ訴狀ニハ訴訟物ノ價額ニ應シ左ノ區別ニ從
 ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

訴訟物ノ價額金五圓マテ 貳拾錢
 同 拾圓マテ 三拾錢
 同 貳拾圓マテ 六拾錢
 同 五拾圓マテ 一圓五拾錢
 同 七拾五圓マテ 貳圓貳拾錢
 同 百圓マテ 三圓
 同 貳百五拾圓マテ 六圓五拾錢
 同 五百圓マテ 拾圓
 同 七百五拾圓マテ 拾三圓
 同 千圓マテ 拾五圓
 同 二千五百圓マテ 貳拾圓
 同 五千圓マテ 貳拾五圓
 同 五千圓以上八千圓ニ達スル毎ニ貳圓ヲ加フ

訴訟物ノ價額ヲ算定スルニハ民事訴訟法第三條乃至第六條ノ規定ニ從フ
 第三條 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ付テハ其訴訟物ノ價額百圓ト看做シ印紙ヲ貼用ス可シ財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ由テ生スル財産權上ノ訴訟ト併合スルトキハ其多額ナル一方ノ訴訟物ノ價額ニ依リ印紙ヲ貼用ス可シ

第四條 本訴ト反訴ト其目的カ同一ノ訴訟物ナルトキハ反訴ノ訴狀ニ印紙ヲ貼用スルヲ要セズ

第五條 控訴狀ニハ第二條ノ規定ニ從ヒ其半額上告狀ニハ其全額ノ印紙ヲ加貼ス可シ

第六條 左ニ掲クル書類ニハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第一 抗告
 第二 故障
 第三 證據調ノ申立
 第四 假差押及ヒ假處分ノ申請
 第五 判決ヲ送達アランコトヲ求ムル申立
 第六 執行力アル正本ヲ求ムル申立但此正本ノ數通ヲ求ムルトキハ其一通毎ニ五十錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用ス可シ

第七條 和解及ヒ督促手續ニ付キ民事訴訟法第三百八十二條第三項及ヒ第三百九十條ノ規定ニ依リ訴カ區裁判所ニ繫屬スルトキハ第二條第三條ノ規定ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 再審ヲ求ムルノ訴狀ニハ其訴ヲ爲ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第九條 原狀回復ノ申立ニハ其書面ヲ差出ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十條 答辯書其他前數條ニ掲ケサル申立及ヒ申請ニハ貳拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十一條 民事訴訟法第九十七條第一號ノ場合ノ外此法律ニ從ヒ印紙ヲ貼用セザル民事訴訟ノ書類ハ其効ナキモノトス但印紙ヲ貼用セス又ハ貼用スルモ不足アルトキハ裁判所ハ相當印紙ヲ貼用セシメ之ヲ有効ナラシムルヲ得

第十二條 印紙ノ種類及ヒ貼用方ハ明治十七年第四號布達ニ依ル

第十三條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スルコトヲ許サズ

第十四條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二拾圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス

第十五條 前條ノ規定ヲ犯シタル者ニハ刑法ヲ減輕シ再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用非ス

第十六條 第六條第十條乃至第十二條ノ規定ハ非訟事件ニ之ヲ準用ス

○法律 明治二十三年八月十五日 朕商事非訟事件印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日

ヨリ施行スベキコトヲ命ス

御名 御璽

法律第六十六號

商事非訟事件印紙法

第一條 商法中登記ニ關ル場合ヲ除ク外非訟事件ニ付裁判所ノ命令其他ノ處分ヲ求ムル者ハ以下數條ノ手續ニ從ヒ其差出ス書類ニ民事訴訟用印紙ヲ貼用ス可シ但口述ヲ以テスル場合ニ於テハ其調書ニ印紙ヲ貼用スベシ

第五條 第六條第七條ノ場合ニ於テハ管財人ヨリ差出ス計算書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第二條 左ニ掲ケルモノニ付テハ五拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

一 抗告又ハ假差押ノ申立

二 債權者ヨリ爲ス破産宣告ノ申立

三 支拂猶豫ノ申立

第三條 左ニ掲ケルモノニ付テハ貳拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

一 抗告ニ對スル答辯

二 裁判所ノ命令其他ノ處分ノ申立ニシテ本法ニ於テ特ニ規定セサル非訟事件ニ係ルモノ

第四條 破産手續ニ付テハ破産財團中ノ貸方金額ニ應シ左ニ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用

ス可シ但財團管理費用其他破産手續上ノ費用及ヒ財團ノ爲メニ負擔シタル債務並ニ別除ノ辨濟ニ供スル金額ハ貸方金額ヨリ之ヲ扣除ス可キモノトス

財團ノ價額五圓マテ 四拾錢
 同 拾圓マテ 六拾錢
 同 貳拾圓マテ 壹圓貳拾錢
 同 五拾圓マテ 三圓
 同 七拾五圓マテ 四圓四拾錢
 同 百圓マテ 六圓
 同 貳百五拾圓マテ 拾三圓
 同 五百圓マテ 二十圓
 同 七百五拾圓マテ 貳拾六圓
 同 千圓マテ 三拾圓
 同 貳千五百圓マテ 四拾圓
 同 五千圓マテ 五拾圓

同六五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ四圓ヲ加フ

第五條 破産手續ニ付テハ財團ノ配當アル毎ニ其配當金額ノ割合ヲ以テ印紙價額ニ相當スル金額ヲ引去リ置キ終局計算ニ至リ配當金總高ノ割合ニ從ヒ相當印紙ヲ貼

用スヘシ

第六條 協賛契約ニ依リ手續ヲ止メタルトキハ第四條ニ掲ケタル印紙ノ半額ヲ貼用ス可シ

第七條 破産手續再施ノ場合ニ於テハ破産手續開始ニ於ケル場合ト同一ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 本法ニ定ムル印紙代價ノ負擔ニ付テハ民事訴訟法第一編第二章第五節ノ規定ヲ準用ス

民事訴訟用印紙法ハ本法ノ規定ニ牴觸セサルモノニ限り之ヲ準用ス

◎民法

○法律 明治二十三年八月二十日
 朕家資分散法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

法律第六十九號

家資分散法

第一條 民事訴訟法ノ強制執行處分ニ因リ義務ヲ辨濟スル資力ナキ債務者ニ對シテ

ハ管轄裁判所ハ職權ニ因リ又ハ申立ニ因リ決定ス以テ家資分散者タルノ宣告ヲ爲ス可シ

右ノ決定ハ口頭論辯ヲ要セスシテ之ヲ爲スコトヲ得

此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二條 前條ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三條 第一條ノ宣告ハ裁判所及市町村ノ揭示場ニ揭示シテ之ヲ公告ス可シ

第四條 家資分散者ハ其宣告ヲ受ケタル日ヨリ撰舉權及被撰舉權ヲ失フ

家資分散者ノ復權ニ付テハ商法第千五十五條以下ヲ準用ス

第五條 商法及本法施行以後ニ於テ從前ノ法律中身代限處分ヲ受ケタル者ニ對シ公

權ノ喪失ヲ定メタル條項ハ破産又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタル者ニ對シ効力ヲ有ス

◎銃 砲 彈 藥

○內務省訓令第二十八號 明治二十三年八月九日

明治十八年(二月)當省甲第一號達ハ廢止ス

◎囚 獄

○勅令 明治二十三年八月二日

朕集治監假留監官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
御 名 御 璽
勅令第百五十三號

集治監假留監官制

第一條 各集治監假留監ニ左ノ職員ヲ置ク

典 獄

書 記

看守長

監獄醫

第二條 各監ニ典獄一人ヲ置ク奏任三等以下トス內務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ監獄ノ

事務ヲ掌理ス

第三條 典獄ハ所屬ノ官吏ヲ統督シ判任官ノ進退ハ內務大臣ニ具狀シ看守以下ハ之

ヲ專行ス

第四條 典獄ハ臨時ノ須要ニ依リ判任官以下俸給豫算定額内ニ於テ雇員ヲ使用スル

コトヲ得

第五條 典獄ハ一週年末ニ其監ノ豫算定額内ニ於テ判任官以下特別ノ勤勞アル者ヲ

賞與スルコトヲ得其判任官ニ係ルモノハ內務大臣ニ具狀シ看守以下ニ係ルモノハ

之ヲ專行ス

第六條 典獄ハ法律命令ノ定ムル所ニ從ヒ所屬官吏ヲ懲戒ス其判任官ニ係ルモノハ

内務大臣ニ具狀シ看守以下ハ之ヲ專行ス

第七條 書記ハ判任トス典獄ノ命ヲ承ケ庶務ヲ分掌ス

第八條 典獄事故アルトキハ上席書記内務大臣ノ命ヲ承ケテ其事務ヲ代理ス

第九條 看守長ハ判任ニ等以下トス典獄ノ命ヲ承ケ監獄ノ戒護ヲ掌リ看守ヲ指揮ス

第十條 監獄醫ハ判任トス典獄ノ命ヲ承ケ監獄ニ係ル醫務ニ從事ス

第十一條 東京集治監宮城集治監三池集治監及兵庫假留監ヲ通ジテ書記三十五人看

守長三十人監獄醫八人ヲ以テ定員トス

第十二條 看守ニ係ル規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第十三條 事務ノ分課並處務ノ規程ハ内務大臣之ヲ定ム

第十四條 監獄職員ノ外各監ニ教誨師一人乃至二人ヲ置キ判任ノ待遇トス

第十五條 集治監所在ノ地ニ設ケタル假留監ニハ別ニ其職員ヲ置カス集治監ノ職員

ヲ以テ之ニ充ツ

◎雜類

○内務省訓令第三十號

明治二十三年八月二十三日

廳府縣 憲兵司令部

集治監 假留監

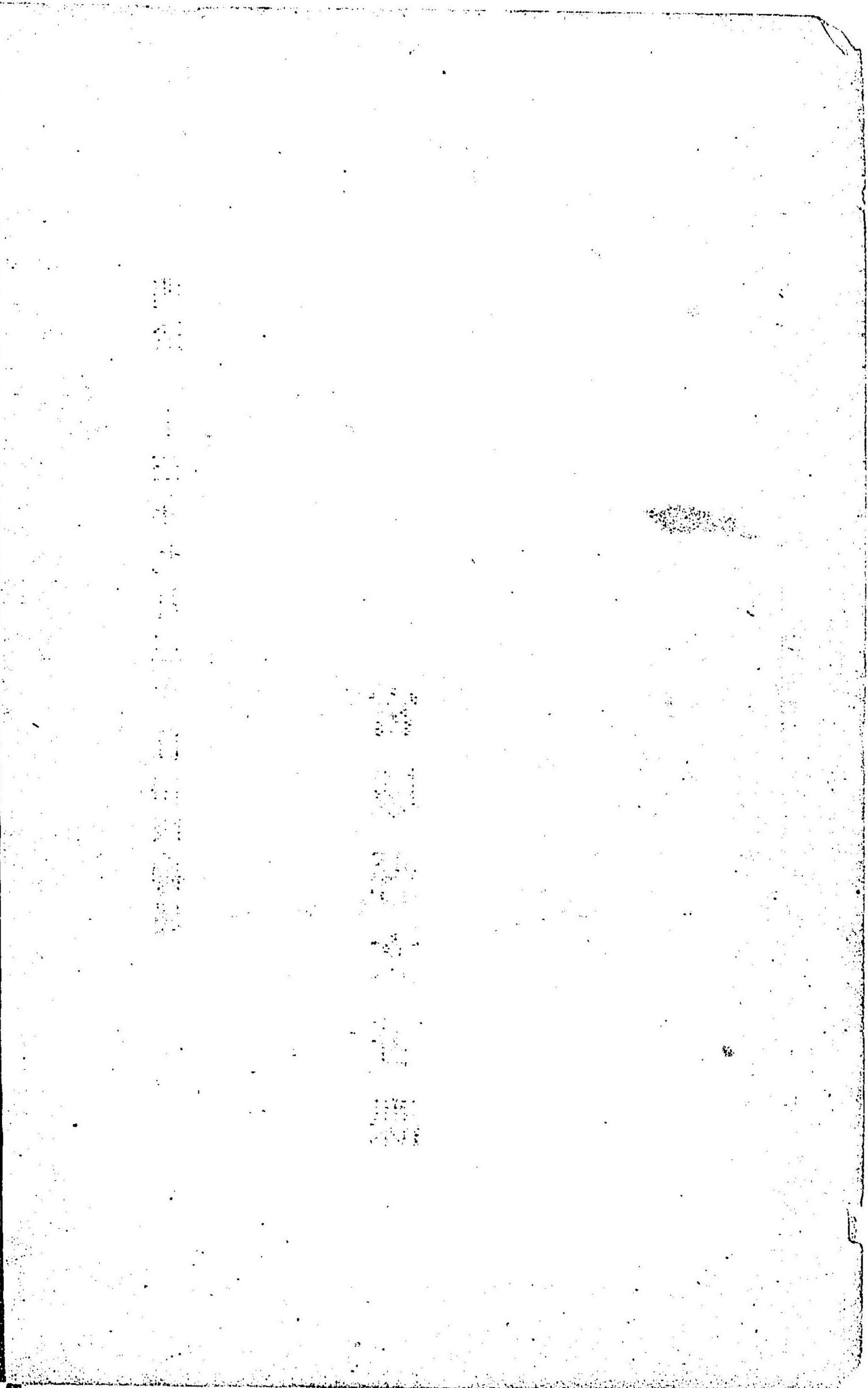
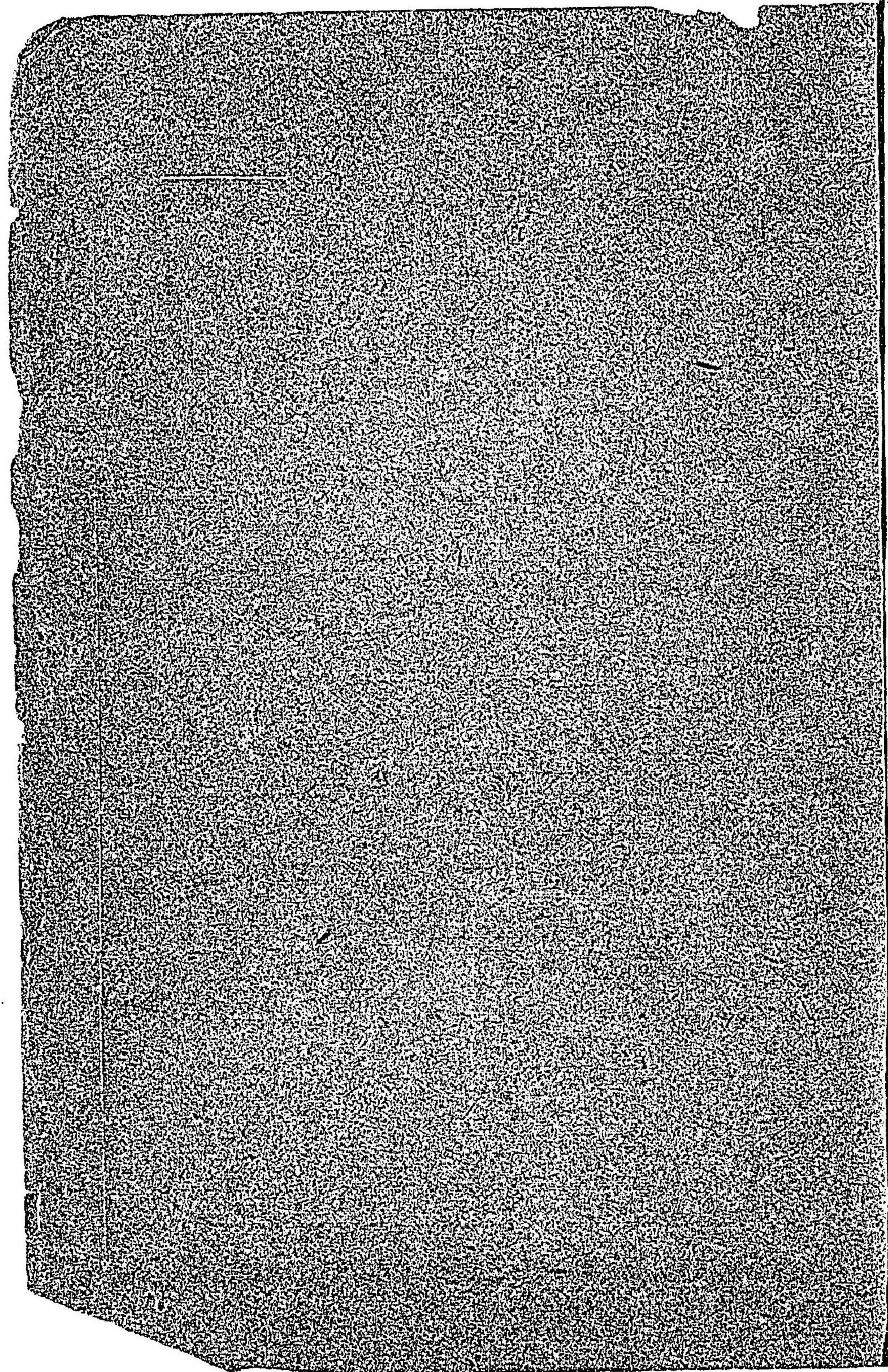
明治二十一年(十月)内務省訓令第二十號内務報告例別冊ノ通更定ス

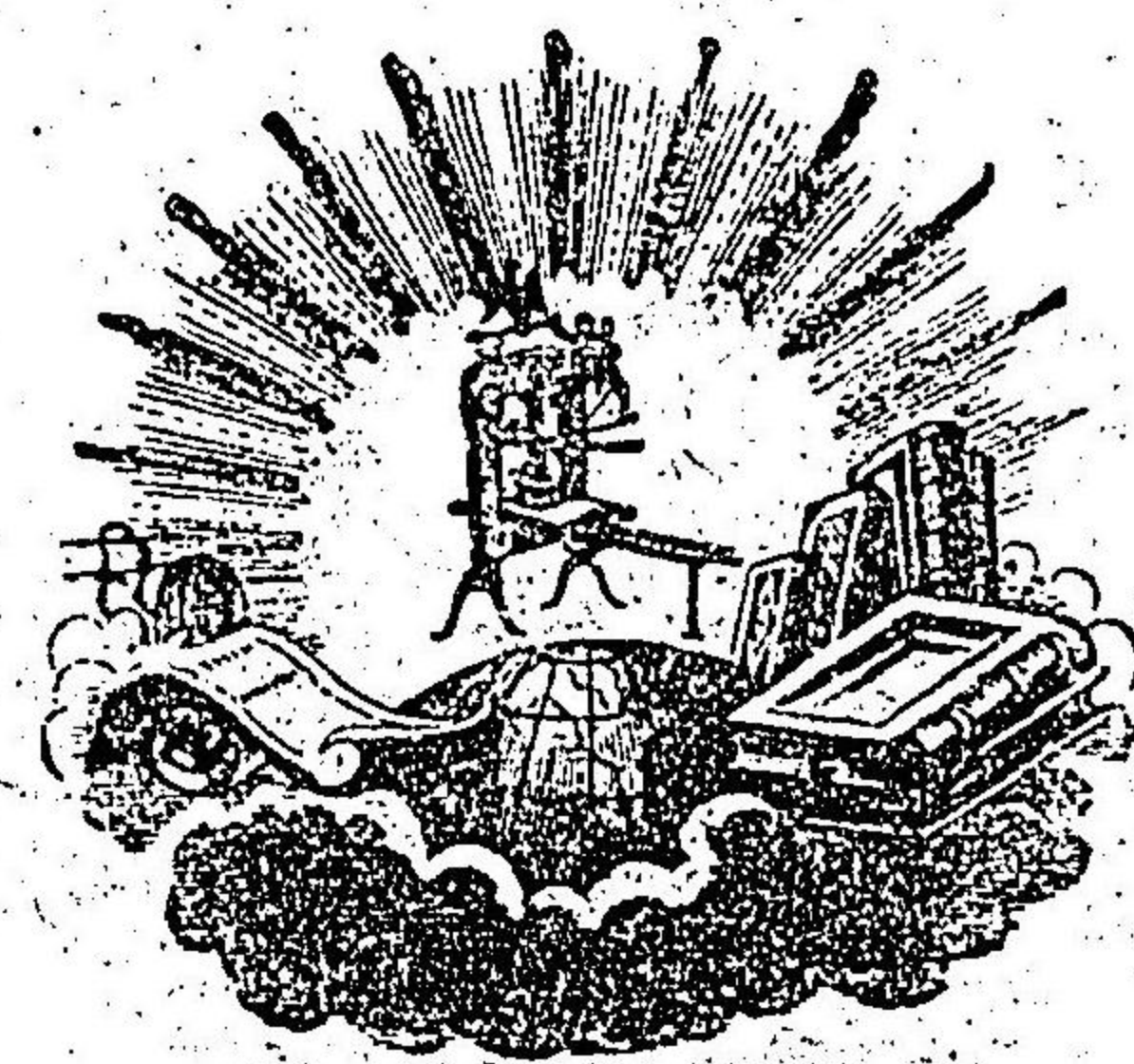
但別冊ハ別ニ領ツ

宮城縣文書課
編纂
發行
昭和十一年

明治二十三年九月三十日出版御届

宮城縣文書課





行印社版活城官